

高木 まさき (たかぎ まさき)

1958年生まれ。横浜国立大学教育人間科学部教授。光村図書¹の平成18年度版中学校国語教科書編集委員を務める。主な著書に、『「他者」を発見する国語の授業』(大修館書店)、『「本の世界」を広げよう』(共編著 東洋館出版社)など。

教育内容のリストラを考える

横浜国立大学教授 ^{たかぎ}高木 まさき

先日(二〇〇四年十二月七日)発表されたOECDの学習到達度調査で、「読解力の低下」が指摘されました。わたしは一つ危惧しているのですが、それは、これを狭い意味での「読解」ととらえて、以前の「読解」に戻ればいいと誤解してしまうことです。もちろん、従来の読解もすべてが否定されたわけではなく、詳細な読解に偏りすぎることが否定されただけです。ただ、昔と比べて大幅に授業時間数が減っている状況の中で、今までやってきたことを短時間でやるうとしても行き詰まると思います。教材は、ものによっては、ある一点に絞って学習することも必要だと思います。ポイントがわかれば、学習内容全体の意味が見えてくるという場合もあります。

現在の国語教科書は、新学習指導要領で「言語活動例」が重視されたことにより、従来の読本型の構成からは姿を変えつつあります。「読解」は、活動とともに進むという方向に進んでいるといえます。小学校では、活動に関しては、問題はあるもののある程度経験を積んできましたが、中学校では経験を積む前に戻つてしまっている印象があります。時間数の減少もあり、学習に対する姿勢も小学生と中学生では違います。中学生は、内面的にこまかしがきかない年頃です。納得できないこと、興味が湧かないことにはついてこない。そのような生徒に対して、まずは、先生方自身が活動の意義をよく考え、この教材ではどんな言語活動がありえて、それがなぜ今必要なのか、意識していただきたいと思っています。そうすることで学習のポイントが自然と絞れてきます。

以前、わたしのゼミの学生が中学生にアンケートをとったことがありました。ある中学生が言うには、「中学校では、学校でしかできないことをちゃんとやってほしい。中途半端に受験対策をしないでほしい。」と。学校には学校の勉強があるはずだ」という問題意識を中学生なりに持っているんですね。学校でできることには限りがある中で、どこにポイントを置くべきなのか。「読むこと」に関していうならば、まず、その教材を通して「読む力」の初歩を習得すること。読む量は、教科書だけでは絶対的に足りないわけですから、読む意欲をどれだけ育てていくことができるか、という点に中学校での「読むこと」の教育の意義があると思います。

今は、子どもたちをとりまく言語環境が非常に薄っぺらだと思っています。昔は、一つの家庭でも、何世代かの人間が同居していて、いろいろな層の言葉が飛び交っていました。難しい言い回しを理解しようとチャレンジすることに楽しさもありました。言葉の力は「言葉のシャワー」を浴びることによって育ちます。逆にいえば、「言葉のシャワー」以上の力は決してつきません。教科書だけでは、「言葉のシャワー」は足りませんが、教科書はきつかけやモデルになると思います。きつかけをどれだけ有効利用できるか、どれだけ広がっていくことができるか、指導のしがいがあるところといえます。

先にも述べましたが、「言語活動例」が今後ますます重視されることにより、教科書は多様な機能を盛り込んだものになると思います。特に、「言語活動の方法を示す教材」や、「読書案内」など、学習を発展させるための機能、「生徒が自己評価できるような機能」などの必要性が増してくることが考えられます。しかし、教科書が多様な機能を盛り込んで華やかになればなるほど、目の前の生徒に何が必要かを見極める「教師の目」がより一層重要となります。多方面からさまざまな力を求められる今だからこそ、もっと指導内容を明確にして、教育内容のリストラをするべきではないかと思えます。今改めて、「どんな学習が必要なのか」考える時期にきています。

(二〇〇四年十二月十五日 談)